

テイル形の非アスペクト的意味(2)

——報告性の射程——

柳 沢 浩 哉

テイル形に対する研究は、従来、次の二つの仮定の下に行われてきた。第一は、テイル形の意味はル形との対立として現れるという仮定であり、第二は、ル形とテイル形はアスペクト的意味において対立するという仮定である。本稿は、この二つの仮定の内、特に第二の仮定に対して修正を求めようとするものである。テイル形とル形の対立は、動詞文における義務的な対立として、他のアスペクト形式から明確に区別される基本的な対立であるとともに、二項対立の形をとった対立であるという点は原則的には正しい。しかし、テイル形がル形とアスペクト的意味のみにおいて対立するという第二の仮定に対しては、問題点が指摘できる。また、従来、経験とよばれてきた意味においてテイル形は、ル形ではなくタ形と対立する。筆者は、拙稿において、アスペクト的意味からでは説明できないテイル形の用例を収集し、それらを説明するために、テイル形に報告性というムード的な意味を仮定すべきことを主張した¹⁾。本稿では、報告性の射程を拡大することを課題とし、従来、経験と呼ばれてきたテイル形の意味について改めて検討を加えるとともに、報告性がアスペクト的意味から派生したものではないことを論じ、最後に、テイル形の報告性とアスペクト的意味との併存の状況を整理する。

本稿は次のような構成を取る。報告性の概説(第1節)。報告性の再規定(第2節)。テイル形とタ形との対立(第3節)。報告性の独立性(第4節)。報告性とアスペクト的意味の併存(第5節)。

1

言うまでもなく、テイル形の第一の機能はアスペクト的意味の表示であり、その意味はル形との対立として現れる。しかし、両者のアスペクト的な対立の程度は一様ではなく、アスペクト的な対立が極めて希薄な場合、すなわち、ル形・テイル形のいずれを用いても、アスペクト的意味にほとんど違いの生じない場合がある。しかし、そのような場合でも、二つの形式の間には何らかの文法的な差異を読み取ることができる。次に、そのような用例を列挙してみよう。なお、本節の内容は旧稿と重複することをあらかじめお断りしておきたい。

引用、要約、解説の文におけるテイル形の使用

次の文が読書感想文の中で本の内容を紹介した文であると仮定した場合、最も普通に使われるのは(1)~(3)のどれであろうか。

(1) 作者はこの本の中で兄弟の絆と葛藤を描く。

(2)作者はこの本の中で兄弟の絆と葛藤を描いた。

(3)作者はこの本の中で兄弟の絆と葛藤を描いている。

いずれもありえない表現ではないが、テイル形を使った(3)が最も普通の文であろう。要約を述べる文ではテイル形が高い頻度で現れる。次の(4)でも要約部分にテイル形が現れている。

(4)あちら様では、毎月お化粧品を3万円ほど出すっておっしゃってるんです。(『闇の中から』)
また、引用を導く文でもテイル形の使用頻度が高い。

(5)孫氏は「用間篇」の中でこういっている。(『戦争と人間』)

(5)の後には引用文が続いている。また、語りにおいて、解説文にテイル形が高い頻度で現れることを永尾章曹氏が指摘している²⁰。

(6)乗客は八九人であった。私の前に電気局の章のついた大黒帽子をかぶった法被着の若者がかけて居た。若者は不機嫌な顔をしてうつらうつらとして居る。(『出来事』)

(6)では後の二つの文が最初の文の解説となっている。語りに限らず、解説文においてはテイル形が多用される。(7)は写真の下に付けられた写真の解説文である。

(7)左上の白うちぎをまとった女性は、小刀で布を織っており、手前の二人の若い女性のうち、左側は裁たれた布を縫い、右側は針に糸を通している。(『日本全史』)

動作主の三人称化

(8)彼の解釈には問題があると思われる。

(9)彼の解釈には問題がある思われている。

(8)の動作主は話し手であるが、(9)の動作主は多くの人(三人称複数)である。

(10)みんなで歌を歌うよ。

(11)みんなで歌を歌っているよ。

(11)ではテイル形によって、「歌う」の動作主が三人称化しているだけでなく、文のモダリティーも変化している。テイル形が観察、あるいは目撃という意味を付加するためである。

(12)*山田はひどく悲しむ

(13)山田はひどく悲しんでいる。

「悲しむ」のような感情形容詞と対をなす動詞は、話し手の心理状態を表す意味を持つため、ル形では三人称を主格とすることはできないが、テイルを下接することにより、文法的な文を作ることができる。これらの現象を、テイル形による動作主の三人称化としてまとめておきたい。

スポーツ実況におけるテイル形の排除

スポーツ実況においては、テイル形が排除される²¹。

(14)バッター打ってショートゴロ。ショート取って一塁へ送ります。

(15)霧島、引きつけて出ます。寄った。寄りきり。

これをテイル形を使って言うと、他人ごとのような臨場感の乏しい表現になってしまう。

(16)バッター打ってショートゴロ。ショート取って一塁へ送っています。

(17)霧島、引きつけて出ています。寄っている。寄りきり。

報告性

以上のテイル形の用法あるいは意味を、従来指摘されているテイル形のアスペクトの意味から説明することは難しい。筆者は、これらを統一的に説明するため、テイル形に対して報告性という非アスペクト的な意味を仮定した。報告性とは次のようなものである。

(18)テイル形は次の意味を表す。

①話し手は何らかの現象を観察している。

②言表は観察結果の報告である。

③言表は二次的情報である。

筆者は「一次的情報」と「二次的情報」を次のように定義する。話し手が五感から直接に得た情報が一次的情報であり、それらに解釈、要約、選択などの知的操作を加えることによって得られた情報が二次的情報である。そして、二次的情報の典型的な形は次の二つである。一次的情報をもとにした解釈。一次的情報を取捨選択した結果。

テイル形の三人称化は②から説明できる。自分自身を観察することはできないため、言表が三人称化されるのである⁹⁾。また、引用・解説・要約などにおけるテイル形は二次的情報という点から説明できよう。そして、スポーツ実況においては、二次的情報であることの表示が情報の鮮度を落としてしまうために、テイル形が排除されるのである。次節では、報告性を別の角度から見てみたい。

2

30年程前に、「バラが咲いた」という歌謡曲が大流行した。この曲のタイトルは「バラが咲いた」であり、「バラが咲いている」ではいけない。メロディーの上では「バラが咲いている」という歌詞も可能なのであるが、ここでテイル形を使ってしまうと、咲いているバラの花を見つけた時の感動が伝わってこないからである。「バラが咲いている」でも咲いているバラを見つけたという言表内容は伝わるはずであるが、なぜテイル形ではいけないのであろうか。それは、話し手の視野の違いとして説明すると分かりやすいかもしれない。

(19)バラが咲いた。

(20)バラが咲いている。

(19)では、話し手は他の一切を見ずにバラの花だけに注目している。それに対し(20)の話し手は、庭全体、あるいは花壇全体を見回し、その中でバラを特に取り出して表現しているのである。先に上げたスポーツ実況の表現も、このような説明の方がより実態に近いのではなからうか。ル形やタ形による表現では、他の一切が無視され、力士や野球選手だけが注目されるのに対し、テイル形では、土俵やグラウンドを広く見回した表現となってしまう。テイル形は言及されていない部分にまで広く目を向けた表現を作るため、対象との間に距離を感じさせ、発見した時の感動、あるいは実況の迫力を薄めてしまうのである。(19)に比べ(20)は、冷静さや客観性を感じさせる表現とも言えよう。

以上の説明は(18)の報告性を別の角度から述べたものである。前節においては報告性を、情報の加工という面から規定したが、これを逆の方向からとらえれば、言表には現れない情報を話し手が持っているということができるであろう。報告性は次のように規定することも可能である。

(2)言表に現れない捨象された情報が存在することを示す。

聞き手の側からみれば、このようなとらえ方の方がより実態に近いかもしれない。

3

本節では、テイル形がタ形と対立する例を検討したい。この点については、旧稿において経験の意味の検討という形で扱っているが、本稿では経験を、より広範な角度から再び検討してみたい。テイル形がタ形と対立するのは、過去の事象の叙述に対してテイル形が使われる場合である。次のような状況を想像していただきたい。祖母から電話がかかってくる。祖母と話をしていた父が受話器を置くと、話の内容を知りたがっている家族が父に電話の内容を尋ねる。この状況においては次のどちらの形が選択されるであろうか。

(2)おばあちゃん、何て言ったの？

(23)おばあちゃん、何て言ってたの？

ほとんどの場合(23)が選択されるであろう。しかし、この状況に次のような付帯条件が加わると、選択される形式は変わってくる。たとえば、電話での祖母の話が遺産相続をめぐる問題であり、家族が祖母の言葉の一字一句を正確に知りたがっているという条件である。この条件が加われば(2)が選択されるであろう。つまり、要約を求める時にはテイル形が使われ、言い換えや曖昧化が許容されない時には、タ形が選択されるのである。類例をもう一つ挙げてみよう。今度は次のような状況を考えていただきたい。Aの言葉によってB子がひどく傷つけられた。それを知ったCがAを詰問する場面である。

(24)お前は彼女に何て言ったんだ。

この時、(25)のようにテイル形が選択されることはない。

(25)お前は彼女に何て言っていたんだ。

この状況においてCが問題としたいのは、Aの言葉の一字一句、Aの言葉そのものであるが、(25)のようにテイル形を使ってしまうと、問いの焦点が言葉そのものから、Aの話し 요약 (知的加工を経た内容) に移ってしまうのである。次の例も観察対象は発話であるが、報告性の現れ方は多少異なっている。(26)は殺人容疑をめぐる刑事が容疑者を尋問している場面である。

(26)「古賀吾市の話によれば、本年十一月に(中略)バス旅行があった。それは君の文学的将来を激励する会だったが、途中の昼食の休憩中に、そこへ来た芝犬に君は石を投げつけた。君のその行動は異常なくらい神経質だったと古賀は言っている。」「古賀君がどうして、そんなことを言ったかわかりませんが、私はただ弁当を食べてあさっている犬がうるさいので、それを追い払うつもりで石を投げただけであります。」「その犬は芝犬である。その海岸地から約二キロばかり南の山間部にある菅原地区の農家の飼犬である。君は、その芝犬に見おぼえが

あったのではないか。] (『渡された場面』)

(26)においてテイル形が問題としているのは、話の要約ではない。そして、同一の行為について、刑事がテイル形を使っているのに対し、容疑者がタ形を使っていることに注意する必要がある。(26)は犯罪の有無をめぐるやり取りであるが、(26)に登場している古賀は犯行の現場を目撃しているのではなく、容疑者の犯行を暗示させる行動を目撃しているだけである。まず、テイル形を使った刑事のせりふについて考えてみよう。この部分の焦点は、古賀の証言そのものではなく、古賀の証言から推理できること、証言から導かれる結果である。そのため、テイル形を使い、焦点を古賀の言葉自体から移しているのである。(23)(24)においてテイル形は、発言された言葉そのものから話の要約へと焦点を移す働きをしていたが、(26)では言葉自体からその結果へと焦点を移す働きをしている。より一般化すれば、行為自体から行為の結果への焦点の移動である。テイル形とタ形との対立において、報告性はこのような意味として現れるのである。一方、(26)において容疑者は古賀の証言に対してタ形を使っている。この場面で容疑者は、話の焦点を古賀の言葉そのものに置いておきたいからである。ここで古賀の証言を承認してしまうと、必然的に話の焦点はそこから暗示される結果、容疑者の殺人へと進んでしまう。これを阻止するには証言が事実とは異なることを主張するしかなく、容疑者は主張そのものに焦点を置かざるを得ない。これが容疑者がタ形を使った理由である。(26)において、同一の行為に対し、刑事がテイル形を使い、容疑者がタ形を使っているのは、ともに必然的な選択なのである。

本節での考察をまとめておこう。テイル形がタ形と対立する場合、報告性は、次のような文章論的な意味の対立として現れる。

(27)タ形では行為そのものに焦点が置かれるが、テイル形では行為そのものではなく、その行為から導かれる結果に焦点が置かれる。

(23)や(24)において見られた話の要約が、「行為から導かれる結果」に含まれることについては説明を要しないであろう。そして、(27)が従来、経験と呼ばれてきたものの正体である。

経験に対する従来的一般理解は次のようなものであろう。「過去の出来事の中でも特に話し手が意義を与えようとする出来事、あるいは現在の状態とのつながりを持つ出来事が、タ形ではなくテイル形で叙述されるもの。そして、経験は結果の意味から派生している。」経験が表現するとされる「現在の状態とのつながりを持つ出来事」とは、「行為から導れる結果」であるし、そのような結果を生み出している行為は「特に話し手が意義を与えようとする出来事」である。経験は、結果の特殊化した意味ではなく、報告性の一形態である。そして、過去の事象の叙述においてテイル形は、報告性という意味でタ形と対立するのである。

4

1節に挙げたテイル形の特殊な意味・用法は、アスペクトの意味から必然的に生じる文体論的特徴であると説明されることが多い。それらを、文体論的特徴と位置付けた上で、アスペクトの意味のバリエーションとして処理する立場である。このような立場に立つ代表的な研究者として工藤

真由美氏の説を検討してみたい。氏は、テイル形の文体論的な意味について最も詳しく研究している研究者の一人でもある。氏は、ル形とテイル形のアスペクトの意味の対立を、「ひとまとまり性」と「動作の継続性」の対立に収斂させ、テイル形の特殊な意味・用法を継続性のバリエーションであると考えた。

テイル形は(28)のような現象描写文において典型的に使用される。

(28)子供が公園で遊んでいる。

工藤氏はテイル形が描写文において使用される理由を次のように述べている⁶⁾。

(29)シテイルが運動を持続中のものとしてさし出すことは、それを一つの全体としてひとまとまり的にとらえるのにくらべ、叙述を生き生きとさせるだろう。話し手が運動の展開の中に身をおき、眼前に展開されつつある、あるいは結果が残っているのを具象的に描くことになるからである。(用例省略)シテイルが「具象性＝描写性」という表現＝文体論的な意味をもっているのに対し、スルは「事実報告的(現実叙述的)」である。従って次のように事実の有無が問題となるときにはスルが選ばれるであろう。

見たんですか、見なかったんですか？簡単なことですよ。イエスカノーで答えて下さい。継続性→具象性＝描写性→生き生きとした叙述、という説明である。さらに、(29)に続く文章の中で工藤氏は、具象性から、テイル形の「目撃性＝知覚性」が導かれるとも述べている。しかし、継続性から描写性が必然的に導かれ、ひとまとまり性から事実報告的が必然的に導かれるという説明には賛成しかねる。

1節で、スポーツ中継においてテイル形が排除されることを指摘した。スポーツ中継は、描写性、生き生きとした描写、目撃性などが最も要求される場面のはずであり、ここでテイル形が排除される事実は、工藤氏の説明の反例となる。一方、工藤氏が(29)に挙げた例文「見たんですか、見なかったんですか？」のスルは、氏の言うとおりの「事実報告性」から導かれているように見える。しかし、同じ事実報告でも、「被告は～と陳述しています。」「目撃者は～と語っています。」のような文の中でテイル形を使うことは少しも不自然ではない。この二つの文が描写的でないことは明らかである。つまり、事実報告の文の中でも、テイル形とル形の両方の形式が可能なのであり、テイル形とル形は、描写性と事実報告的という形では対立していないのである。(29)に引用されている例文は、行為それ自体に焦点を置いた文において使用されたタ形の例であるから、前節の(27)に述べた意味において説明されるべき例文である。

英語の進行形が描写性という意味を持たないことから分かるように、描写性と継続性とは、質的に異なる特徴であるとともに、連続的な性質を持つものでもない。報告性は、テイル形のアスペクトの意味から派生したものではなく、テイル形は報告性とアスペクトの意味との二つの意味を持つと考えるべきである。ただし、報告性とアスペクトの意味は矛盾するものではなく、多くの場合、アスペクトの意味と報告性は同時に観察される。そのため、描写性は、アスペクトの意味と連続的あるいは必然的な関係にあるとみなされ、報告性はアスペクトの意味の中に埋もれてきたのである。

本節では、二次的情報という点に注目して、アスペクト的意味と報告性との関係を整理してみたい。寺村秀夫氏は、結果というアスペクト的意味の使用に対し、ある種の文章論的制限のあることを指摘している⁶⁾。

(30)この鰯は死んでいる。

(31)石が落ちている。

たとえば、魚屋に並べてある鰯を見て(30)のように言う人はいないであろうし、道端に落ちているごく普通の石を見て(31)のように言う人もいないであろう。寺村氏は、結果というアスペクト的意味の使用には、「何らかの普通ではない状況」という制限が存在していることを指摘している。この現象を、1節に示した一次的情報と二次的情報という概念を使って考えてみたい。五感から直接に得た情報が一次的情報、それに解釈、要約、選択などの知的操作を加えた情報が二次的情報である。一次的情報がそのまま言表内容になりえる環境では、感じたままを文の形で表現できるわけであるから、「普通でない状況」という制限は存在しない。「普通でない状況」とは、言表内容に対する価値的な制限であり、言表内容が二次的情報に制限されていることを意味している。つまり、結果というアスペクト的意味においては、言表内容が二次的情報であることが前提とされているのである。言葉を換えれば、結果においては、アスペクト的意味と報告性が不可分に併存しているのである。そして、この延長線上に、テイル形の形容詞的用法という機能も導かれる。

(32)彼女のものの言い方はせかせかしている。

(32)は金田一氏が「第四種」の動詞と分類した例である。この例において「せかせかしている」は「間がぬけている」「丁寧だ」「乱暴だ」「冷たい」等々と対立するものとして理解されよう。「このように、同種のもの異なるありかたの特徴を描くというのは形容詞の典型的な用法である。」⁷⁾(32)においてテイル形はアスペクト的意味をほとんど無くし、形容詞としての意味を担っている。そして、形容詞は話し手の評価を表す言葉であるから、常に二次的情報を表示する。これは、形容詞も結果と同様に「普通でない状況」でしか使われないことから明らかであろう。

(33)空が青い。

(33)は青い空を見ればいつでも使えるわけではない。たとえば、部屋から外に出て青空の印象が強烈であった時とか、空の色が普段以上に鮮やかであることに気付いた時といった「普通でない状況」の中でしか使われない。テイル形の形容詞的用法とは、アスペクト的意味と報告性の二つの意味のバランスが、大きく報告性の方に傾いたものなのである。

このように見ていくと、テイル形のいろいろな意味において、報告性とアスペクト的意味は、それぞれ強さを異にしながら併存していることが分かる。まず、継続と結果という二つのアスペクト的意味について。前述のように、結果においては「普通でない状況」という形で報告性の意味が現れているが、継続にはこのような制限がない。しかし、1節で指摘したように継続であってもスポーツ実況にテイル形が使われることはない。これは、二次的情報という意味が継続にお

いて弱いながら存在しているためである。つまり、継続、結果というアスペクト的意味においても、報告性はその強さを変えつつアスペクト的意味と併存しているのである。一方、経験と形容詞的用法においては、アスペクト的意味は非常に弱くなり、報告性が前面に出ている。このように、いずれの意味においても、テイル形にはアスペクト的意味と報告性の二つの意味が併存しているが、二つの意味は常に、一方がもう一方を覆い隠す形で前面に出る関係にある。報告性はテイル形の一部の用法だけに観察される特殊な意味ではなく、アスペクト的意味と併存する中心的な意味なのである⁸⁾。

このような関係にある二つの意味に対しては、深層においては同一の意味が、現れる環境に応じて異なる形をとって顕在化すると推理するのが一般的であろう。すなわち、同一の意味がアスペクト的意味と報告性の二つの意味として顕在化するという推理である。そして、深層における同一の意味は、二次的情報、すなわち一次的情報に対する加工という点に求められると思われるが、この点の解明は今後の課題としたい。

注

- (1) 拙稿「テイル形の非アスペクト的意味—テイル形の報告性—」(『森野宗明教授退官記念論文集 言語・文学・国語教育』三省堂, 1994) 拙稿はこの続編である。
- (2) 永尾章曹『日本語学』(和泉書院, 1992) 第4章。永尾氏は、テキスト言語学的な角度から、テイル形の用法に対し次のように述べている。語りの中には、事件と説明という二種類の時間の流れがある。それぞれは異なる表現形式によって叙述され、前者は主にタ形、後者は主にテイル形とダによって叙述される。また、鈴木泰氏の立場もこれに近い。(鈴木泰『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析』ひつじ書房, 1992, P. 46)
- (3) この用例は谷口秀治氏が指摘したものである。谷口秀治「テイル形のムードに関する一考察」(1992年度広島大学教育学研究科修士論文)
- (4) 「山田はひどく悲しんでいる。」についての説明は不十分であるが、この点については拙稿「テイル形の非アスペクト的意味—テイル形の報告性—」を参照されたい。
- (5) 工藤真由美「現代日本語のアスペクトについて」(『教育国語』18号, 1989)
- (6) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(くろしお出版, 1984) PP. 136—137
- (7) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』P. 139
- (8) モダリティー論においては、テイル形によって叙述される現象描写文がル形・タ形による現象描写文とともに「主観の加工・判断作用を加えない」とされる。(仁田義雄『日本語のモダリティーと人称』(ひつじ書房, 1991) P. 122) これに対し、筆者の立場では、現象描写文の中でもテイル形の文には主観の加工が認められることになる。